

### 376 び慢性肝炎における肝シンチグラフィによる簡便・肝機能評価法の試み

土光茂治, 矢木健治 (京都市立・放),  
高橋示人, 中野龍一, 新保慎一郎 (同・内科),  
鷹巢晃昌 (同・病理)

肝シンチグラムはCTやUSに比するとSOLの検出能には劣るが、肝予備力の評価としては尚捨て難いものがある。健常者17例、急性肝炎34例、慢性肝炎202例、前硬変28例、肝硬変140例、脂肪肝19例の計435例に対してコロイド肝シンチグラフィを行ない、肝・脾・骨髄及びBack groundにROIを設け、脾/肝面積比、脾/肝、骨髄/肝、骨髄/Back groundの各uptake比を算出し、正常者における上記の各系数の1倍標準偏差を基準として求めた通算のgradeを各症例で算出し、肝予備力の指標とした。臨床検査上、同様に肝予備力の指標とされる血中コリンエステラーゼ、A/G比、ICG、プロトロンビン時間に対する上記の各系数及びgradeとの関連性を検討した。114例の肝組織所見との対比も同時に行なった。上記の各系数及びgradeは血中の各パラメータと総て有意の正又は負の相関を示し、組織所見とも良く一致した。一部で不一致例が観られたものの、本法は10症例を約2時間で消化出来、一般病院でもおよそ肝予備力の評価にroutine検査として適応し得るものと思われた。

### 377 肝細胞癌の診断において肝シンチグラムは必要か?

工藤正俊, 伊吹康良, 藤見勝彦, 富田周介, 小森英司  
織野彬雄, 藤堂彰男 (神戸中央市民・消内) 才木康彦  
山口晴二, 伊藤秀臣, 日野 恵, 池窪勝治 (同・核医学)

近年の超音波断層法(US)の進歩発展により径1cm前後の肝腫瘍も容易に、大した熟練も必要とせずに検出される様になってきた。現在の肝細胞癌(HCC)の臨床の場では存在診断よりもむしろ質的診断、1cm以下の娘結節の診断能が問題とされ、検出感度が低く存在診断のみの肝シンチグラム(LS)は完全にHCC診断のdecision treeからはずれてつあるのが現状である。今回我々は、LSは果たしてHCCの診断に必要な否かについて検討した。1981年より1985年の5年間のHCC490例中LS and/or SPECTの施行された383例を対象とした。Screeningの立場からUSとの存在診断能で評価した。その結果①LSがHCCの診断に不可欠であったもの6例(2%) ②LSがHCCの診断に重要であったもの25例(7%) ③USで検出可能でLSが全く不要と考えられたもの(91%)であった。①②の31例中13例は、右横隔膜下に腫瘍が存在し11例は病理形態的にinfiltrative typeを呈しUS上検出が困難であったと考えられた。結論としてHCCの約9%の症例についてはその診断上LSは必要な検査法であると考えられた。

### 378 肝SPECTにおける解剖学的な欠損について

鈴木孝成, 阿部公彦, 池克志, 広瀬政寛, 黄呂銘,  
柿崎大, 小竹文雄, 麦島清純, 兼坂直人, 赤田壮市  
石田二郎, 若林ゆかり, 井上真吾, 吉村真奈, 網野  
三郎, 村山弘泰 (東医大 放)

肝SPECTはtransverse(T), coronal(C) sagittal(S)の3方向から3次的に見ることが出来るため、SOLの診断能向上に役だっているが、解剖学的な欠損も、より判然と描画されるようになりSOLとの鑑別が困難となり読影上困惑する場合が多い。

今回、我々は1983年~1985年の3年間に本院核医学にて肝SPECTを行った1506名について、retrospectiveに、胆嚢床、腎、IVC、肝門索、肋骨による欠損の出現頻度について検討を試みた。

肝門部の欠損は、T、C、Sのすべての方向で80%以上に認められた。肝門索は、T、Cでは80%以上にみられたが、Sでは65%と低値を示した。胆嚢床は、T、C、S 3方向共に75%以上であった。腎による欠損は、Sで最もよく描出された。IVCは、Tでは70%であったが、C、Sでは55%以下であった。肋骨は、Sで60%近く認められたが他の方向では30%以下と余り認められなかった。

このように各方向で出現しやすい解剖学的欠損の頻度を知ることで、肝SPECTの診断能向上とfalse-positiveの減少に役立つものと思われる。

### 379 肝血管腫に対するSPECT像とPlanar scintigramの比較検討

関 松蔵, 今枝孟義, 広田敬一, 鈴木雅雄,  
又吉純一, 土井偉誉 (岐大 放)

肝血管腫に対して、Planar scintigraphyの有用性が報告されているが、今回我々はSPECT像の有用性について比較検討したので報告する。

方法：ピロリン酸を生食10mlで溶解し、5mlを静注。30分後背臥位にて右肘静脈より、<sup>99m</sup>Tc-Perchnetateを急速静注し、直後より、Siemens製シンチカメラにて3秒毎に126秒間(42 flame)撮像。同時に島津製シンチパック2400にデータを収録した。さらに10度毎、10秒間360度シンチカメラを回転させSPECT像を得た。

対象と結果：手術(1例)血管造影(4例)にて、肝血管腫と診断した5例。Planar scintigramでは描出しえなかった血管腫がSPECT像では描出でき、SPECTの有用性が認められた。対照として肝癌についても検討する。